



# 国土と言葉

十

本多弘之

*honda hiroyuki*

親鸞は、浄土教の宗教心を「欲生心」であると見た。いわゆる「願生浄土」の要求の深層に、自我の要求を払拭できない人間の執心を自己批判して、それを超えていかしめるものがあることを見いだした、ということである。この親鸞の視座を考察しようとしている。その視座から「浄土」として現わされている浄土教の救済具現の場所に、親鸞は「真実報土」と「方便化土」という異なる二重の場がありかたを見いだした。そして、真実の浄土を要求する欲求を「如来回向」の「欲生心」

であると押さえた。真実の場の欲求それ自身が真実からのものよおしだというのである。それに対して、方便化土を要求するのは、人間の自力執心の絡んだ願生心だと言うのである。『浄土論』の解義分で天親論主は、「三種成就は願心莊嚴」であるという。三種成就とは器世間（環境的功德）と衆生世間（仏功德・菩薩功德）に展開された浄土の相のことであるが、それは『無量寿経』の語る法蔵菩薩の本願が建立した世界を、二十九種の莊嚴功德として語っている「二十九句」のことだとす

るのである。浄土が「願心莊嚴」であるということを言い表している文章を、親鸞は「欲生心の解釈の段に引用している（『教行信証』「信巻」）。願心莊嚴の浄土を生み出す法蔵菩薩の願いとは、衆生を済度せずには自己が成就しないという誓願を、衆生を内からこの願に呼応させようとして、衆生の内に呼びかけて立ち上がらせる「欲生心」なのだと言うのである。

一方で、真実の仏身・仏土を建立しようとする法蔵菩薩の因位の願心を、親鸞は、「光

明無量の願」「壽命無量の願」であると決定した。光明無量の願については、その成就の文に十二光の名があつて、それを「正信偈」にも取り上げているし、真仏土を「無量光明土」であるとしているから、衆生のこの世の生活の「無明の黒闇」をどこまでも明るみに転じていくはたらきを象徴する場所として表現しているのだということであろう。「智慧の光明はかりなし」と讃歎される光明のはたらきとは、「生死の苦海ほとりなし ひさしくしずめるわれらをば 弥陀弘誓くせいのふねのみぞ のせてかならずわたしける」と語る宗教的救済であり、それは弥陀の智慧のはたらきなのだ、と言うのである。無限なる智慧を光明無量と誓うのである、と。それに対して、「壽命無量の願」については、親鸞は「真仏土巻」においてどういうこととして考察されたのであろうか。直接には、第十二願成就文を引くほかに何かを語っているようには見えない。しかし『涅槃経』を引用されることから拝察するなら、『涅槃経』の課題である「法ほふ身常住しんじやうぢゆう」を、法蔵願心が「真の仏土」を通して衆生に恵むのだということを見据えられているのではなからうか。「常住」とは時間を突破した法そのものをいうのであり、それはまさに無量寿の願いに対応することになるであろう。

つまり、真実報土の功德とは、一方で光明

無量の破闇満願のはたらきであり、一方で「法身常住」の「無量寿」を恵むということとして明らかにしようというのではなからうか。浄土の功德と言つても、善導が浄土を「涅槃界」であると言つているように、大涅槃を場として象徴するものである。これが「真仏土」についての親鸞の基本的な考え方であろうから、如来が尽未来じんみらい際さいにわたつて「光明無量」「壽命無量」の功德を衆生に恵み続けようとするはたらきを持続する場所の意味が、「涅槃界」たる真実報土なのであるといえよう。

この真実報土による衆生済度の悲願を、願心の所現としての外在的な場所に止めず、衆生を撰取する積極的な意欲として具現しようとするものが、如来の「利他回向」の意図であり、それが「欲生心」となるということなのであろう。その願心が我ら衆生に止むことなくはたらき続けることを、「兆載永劫ちやうざいえいけつの修行」と語るのが説話としての法蔵願心の表現である。自力の執心に絡まれてしか起こらない「願生心」を、「尽未来際」にはたらいいて、真実の欲生心に目覚めるまで育成しようとするのである。その欲生心をあらわすために、親鸞は「信巻」の欲生心釈に「往還おうげんの回向」の文を引証されている。

如来の回向に「二種」の「相」があつて、「往相おうぢゆう」「還相げんぢゆう」と言う。その名の由来は、曇

鸞が『論註』で回向門・第五功德門の「利他の因果」にこの名を与えていることに依る。それを「正信偈」では「往還回向由他力 正定之因唯信心」という。つまり、本願力のはたらきを「往相・還相」の二種の回向とし、これらの回向に値遇ちやくぐするところに、浄土の因たる真実信心を得ることができるといのである。回向の相としての往相還相は共に、如来のはたらきであり、衆生はそれに「もうあう」ことによつて信心を得るのだ、と親鸞は言われるのである。この信心を生み出す原理とも言うべき「二種回向」が、欲生心に打ち込まれてきているということになる。

そもそも、「智慧の光明」も「法身ほふしん」も凡夫の目には見えない。人間の直接経験には入らない。そこから、方便法身を発すのだと曇鸞は言う。「法性法身に由つて方便法身を生ず。方便法身に由つて法性法身を出だす」と。「法身の光輪きわもなし」とも言われるから、見えない光のはたらきは、「回向」とともに衆生にはたらいっている。これによつて、見えるはたらきたる「往相回向」の「教・行・信・証」(「往相の回向について、真実の教行信証あり」と親鸞は押さえる)とともに、見えざる法身のはたらきが大涅槃のはたらきとして「還相の回向」となつて、欲生心を育てるのであるというのではなからうか。

(ほんだ ひろゆき・親鸞仏教センター所長)